

# 愛犬を守るために私たちができること Ⅱ

今回もワクチンについての続きです。

## ワクチンの知識②

犬のワクチン注射とは、微量の病原体を体内に送り込むためにします。その病原体と戦うために体の中で抗体が出来上がり、次に万が一同じ病原体が体の中に入って来たとしても、その抗体がそれをやっつけてくれる・・・という、人間のワクチンと同じ仕組みになっています。

けれども、微量とはいえ、体の中に病原体を入れるわけですから、注意しなければならないこともいくつかあります。

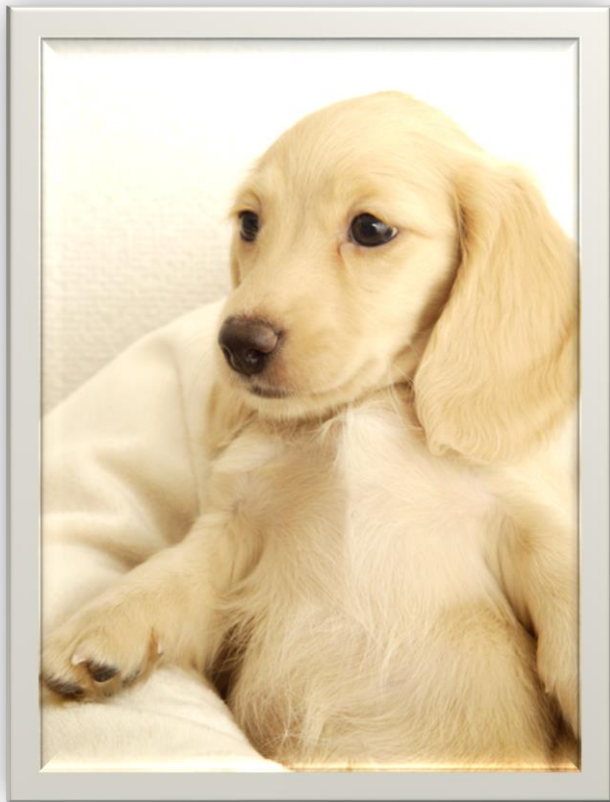
まず、体調が悪い時には接種しないことです。体調が悪く、体力が低下している時には、普通なら感染せずに済む微量な病原体に感染してしまったり、感染はしななくても、吐き気や下痢などの激しい副作用が起きる可能性があります。発情中やその前後のメス犬、妊娠中、授乳中の場合も

避けてください。旅行や引っ越しなどの環境が変わる前後の接種も、わんちゃんの精神的ストレスがある時期ですので、やはり控えた方が無難です。

ワクチン接種は体調が万全の時に受けましょう。シニア犬の場合や、現在治療中の疾患がある場合は、よく獣医さんと相談してください。

また、人間同様、抗体は接種後すぐに作られるわけではなく、約2～3週間かかります。その間も、激しい運動で体に負担をかけるのは禁物です。運動や散歩はいつもよりも控えめにしてみましょう。

もちろんシャンプーもワクチン接種予定日の2～3日前には済ませ、接種後しばらく控えてあげましょうね。



## Mini Column

### 文豪の名前のない猫 VS 英雄の名前をつけた犬

夏目漱石といえば猫を連想しがちですが、犬も飼っていました。夏目家の猫は、『吾輩は猫である』の主人公と同じように、代々、名前はないまま。それに対し、犬（雑種）には「ヘクトー」という立派な名前をつけ、たいそう可愛がっていたようです。ヘクトーとは、ホメロス作といわれるギリシアの叙事詩『イリアス』の英雄Hector からつけられたそうです。

そのヘクトーが病気にかかり入院していたことがあります。その病気というのがジステンパー。ジステンパーは、致死率が高い病気で、後遺症が残ることも多い怖い病気ですが、現在、ワクチンの普及によって感染する犬は昔に比べて激減しています。

ヘクトーのジステンパーは、幸いにも回復しました。しかし、ヘクトーは3歳か4歳の若さで亡くなってしまいました。その数ヶ月後に書かれた『硝子戸の中』で、漱石はヘクトーについて愛情に満ちた話を残しています。また、漱石は庭の一角にヘクトーのお墓もつづいています。『吾輩は猫である』のモデルになった猫のお墓の近く、書斎からよく見える場所につづりました。

「愛犬家住宅住まいづくり」のご相談先



愛犬家住宅  
住まいづくり倶楽部